

## 聖祖晩年に於ける日弁（その二）

鈴木隨順

### 一、聖祖入山の理由

古来先師の間で入山に関して幾多の諸説が述べられているが、御書を典故として論及することにした。「三度諫めて容れらざる故に山林にまじわるべきよし存せしゆえに」、「此山に入る」、「此の山に入れり」と申された御書を拾い挙げてみると次の如くである。

1、国のほろぶべきゆへにや、用ひられざる上、度々あだをなさるれば、力をよばず山林にまじはり候ぬ。（上野殿御返事 定八三六）

2、今適御勘気ゆりたれども鎌倉中にも且テも身をやどし、迹をとどむべき処なければかかる山中の石のはざま、松の下に身を隠し心を静む。（法蓮鈔 定九五三）

3、三度國をいさめんにもちゐらずば國をさるべしと。されば同五月十二日にかまくらをいでて此山に入る。（種種御振

舞御書 定九八二）

4、日本國のほろびんを助けんがために、三度いさめんに御用ひなくば、山林にまじわるべきよし存ぜしゆへにへに、

同五月十二日に鎌倉をいでぬ。（光日房御書 定一一五五）

5、いかにも今は叶ふまじき世にて候へば、かかる山中に入りぬるなり。（南條殿御返事 定一一七六）

6、三度國をいさむるに用ひずば、山林にまじわれといふことは、定る例なり（報恩抄 定一二三九）

7、國恩を報ぜんがために三度までは諫曉すべし。用ひずば山林に身を隠さんとおもひし也。また上古の本文にも、

三度のいさめ用ひずば去れといふ。本文にまかせて且らく山中に罷り入りぬ。（下山御消息 定一三三五）

8、我身に當て心みて候へば、不審なきゆへに此山林には栖み候なり。（三沢鈔 定一四四六）

右の如く入山の理由として考えられる御書は八書ほど数えられる。これは主として儒教的な表現であるが、当初は身延に永住するという意志はなく、自ら把握された真理を全國の人々に聞法せしめようとされた。このことは聖祖が身延に着いた当日、富木常忍に宛てた書簡によつて推察されることができるのである。

「いまださだまらずといえども大旨はこの山中心中に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ。結句は一人になて日本國に流浪すべき身にて候。又たちとどまる身ならば見參に入候べし」（定八〇九）

まだ住地をどこと定めていないけれど、この身延に滞在することになろう。むしろ一人になつて日本國中を歩いて聞法せしめたい。又この身延に立ち留まることになったときは、会に来てもらいたいと思ひますと富木氏に報ぜられてゐる。

入山の理由として考えられるものとして最も注目すべきことは「四条金吾殿御返事」の文面であると先師は述べて

いる。

「諫曉再三に及べば留難重疊せり。仏法中怨の誠責をも身にははや免れぬらん。然るに 今山林に世を遁れ、道を進まんと思ひしに、人々の語様コトバ々なりしかども、旁カタがた存ずる 旨ありしに依りて、當國當山に入りて已に七年の春秋を送る。(定一八〇〇)

という御書について身延の日朝は『元祖化導記』の中で次のように所見を述べている。

「抑今の御文章に人々の語様々也等は、或は籠居の御在所伊豆と望む人も有り、武蔵と望む人も有り、或いは下総などと、各所帯の地へ入御有る可きの由様々也」さらに「旁がた存ずる旨」とあるのは「御所在軽がるしく定めるべきでなく、此の深い文意をくみ取るべきであろうという<sup>①</sup>」というのである。即ち聖祖の身延入山の動機を御意志など、凡人である我々が軽々しく論ずべきではなく、深重に考慮すべきであると注解していることは大いに心得るべきことである。

## 二、日弁を開山と仰いだ高橋入道夫婦

高橋入道は六郎入道と言ひ駿河國富士郡賀島の住人（現富士市）である。その夫人持妙尼は、尼崎本興寺寶藏に護されている建治二年二月の御本尊に、日興添書として「富士西山河合入道女子高橋六郎兵衛入道後家持妙尼仁日興申与之」とある。また日興の「本尊分与帳」に「高橋六郎兵衛入道後家尼は日興の叔母也<sup>②</sup>」とあるので持妙尼は西山河合入道の娘で、高橋入道の妻であり、日興の叔母にあたることは明らかである。従つて持妙尼の姉が日興の母であることが知られる。立正大の高木博士は『日蓮とその門弟』の書に「日興の母方は大宅氏の出身で、同氏は光延以後、

高橋・由井・西山の三氏に分流したことを述べている。<sup>3)</sup>又『群書類従第七輯』（一三四頁）によれば大宅光延は源頼朝の時、高橋・由井・西山の領主であったとの記述があるが、これは御家人であったためであろうと思ふ<sup>4)</sup>と高木博士が述べているように『本化聖典大辞林』も「此の人兵衛尉の官職を受けたる相応の士なるべく……六郎兵衛はもと頼朝の家人なりしならむ」と述べている。故に入道は古来から北条家の御家人と伝えられていたのである。富士郡における六郎兵衛は日蓮門下の有力な外護者であるが、その伝については不明な点が多いがしかしその前に賜書の文面に大事なこと含まれているので後に詳しく述べることにしたい。その前に一切経入蔵のことに触れる。正嘉元年（一二五七）の天災地変に聖祖は疑問を感じ、又正元元年（一二五九）、同二年の飢饉・疫病・餓死という災害の原因を考えるため、岩本實相寺の一切経蔵に入った、この時日興が入門したことを『別頭』・『年譜攷異』も伝えている。このことは「一切経を開き見るに」（強仁状御返事 定一二三二）「一切経を勘へて」（瀧泉寺申状 定一六七七）「一切経蔵に入りて勘へたるに」（中興入御消息 定一七二六）と述べられた御書を典拠としているのであるが、然し岩本と明記された御書をみることはできない。更に「佐渡以前に聖祖が駿河に出向したことを証明し得るものは次の一事而已である。日付・宛名・署名の欠如している（春之祝御書 定八五九）に「さては故南條殿……わざと鎌倉よりうちくだけり、御はかをば見候ぬ」とあることだけである。文永二年（一二六五）時光の父南条兵衛七郎が上野において逝去されると、聖祖は鎌倉よりわざわざ上野に下向され墓参しているのである。南条一族への賜書は五十五篇を数え、富士野郷の地頭で鎌倉在勤中の文應、弘長の頃に聖祖に帰依したものと考えられ、北条家の家人と伝えられている。佐渡配流以前の駿河在住の人々の交流入信等はすべて聖祖鎌倉在任の時のようである。

従来伝えられている岩本入蔵説の最古の文献は聖滅五十年又は七、八十年ごろと推定されている聖祖仮托の御書「法

華本門宗要抄」(定二一六〇)に初めて出示されている。「駿河の國岩本の経蔵に入り、諸経論を引いて之れを勘へ」とある。次に上古の所伝を記した最も信憑度の高いと評価されている大石寺四世日道の『三師伝』(聖祖・日興・日目)と称する所謂御伝土代には聖祖岩本入蔵、日興入門のことは記載されていない。

興門に於ける宗史研究の開拓者といわれる了玄日精(一六〇〇〜一六八三)の著『日蓮聖人年譜』に「駿州岩本 實相寺の経蔵に入りたまふ。爰に於いて御説法あり聴聞して信仰の輩皆受法す、其の中に日興最初に弟子となる是れ駿河御弘通の初めなり」と岩本實相寺の経蔵入りと日興の弟子入り等が初めて述べられている。これより後の『統紀』『年譜攷異』も日精の『年譜』を踏襲したものが岩本入蔵のことを述べ、更に『統紀』は日興の入門十四歳の時と伝えている。

身延久遠寺十一世日朝とならび称される字匠鎌倉妙法寺の啓運日澄(一四四一〜一五一〇)の『日蓮聖人註画讃』にも「駿州に至り大蔵に入り」とあつて岩本とは明記していない。

聖祖御入滅時の年齢は六十一歳、日興三十七歳その差二十四歳である聖祖駿州に至り一切経を閲覽した年齢は三十七歳の時であるから、十四歳入門はあてはまっている。しかしながら若干十四歳にして甲駿地方の伝道はあり得ない。聖祖の岩本實相寺への入蔵も確固たる文献はないことによつて、日興十四歳にして入門という師弟関係も疑問である、故に聖祖・日興の甲駿地方への伝道年代も再考察されねばならないのである。

さて高橋入道の妻が日興の叔母であるという縁から入道は日興の導きによつて入信したと考えられている。しかし日興の駿河での弘通は、日興佐渡から帰つてから後のことであり、即ち文永十一年以後でなければならぬ。

前説の如く駿河富士郡賀島の住人高橋入道は幕府の御家人であり、同じく御家人であり同郷と云つてよい程、地理

的に近い南条兵衛七郎との縁により鎌倉にて入信したもののようである。その謂れは建治三年（一二七六）の高橋入道殿御返事（定一〇八七）の中に次のように述べられた文意による。

「但し去年かまくらより此ところへにげ入候ひし時、道にて候へば各々にも申すべく候ひしかども申す事もなし」  
 去年鎌倉からこの身延へと遁れた時賀島の近くを通るので高橋氏らの館へも立ち寄りたい旨音信すべき筈であつたがそれもしなかつたと述べ、続いて御書は文永十一年三月十三日に三年ぶりに佐渡の國を立つて同月の二十六日かまくらに入り同四月八日平のさいもんの尉にあい三度目の諫暁を行ったことを述べている。次いで重大なことが述べられている。

「たすけんがために申すを此程あだまる事なれば、ゆりて候ひし時、さどの國よりいかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども」<sup>①</sup>

という言葉である。即ち右によつて佐渡在島中すでにいづれかの山中又は海岸に身を寄せる意図を窺うことができるのである。三諫の有無・功罪にかかわらず在島中に既に漂泊の思いもあつたことを推し量られる。このことは静かな内省生活と法華経への信仰に徹しようとの心慮とも拜せられる。続いて長文であるが左の如く述べられている。

「此事をいま一度平左衛門に申しきかせて……今一度はみたてまつらんと千度をもしかども、心に心をたたかひすぎ候ひき。そのゆえはするがの國は守殿の御領、ことに富士などは後家尼ごぜんの内の人々多し。故最明寺殿・極楽寺殿も御かたきといきどをらせ給ふなれば、ききつけられれば各々の御なげきなるべしとをひし心計りなり。いまにいたるまでも不便にをひまいらせ候へば御返事までも申さず候ひき。この御房たちのゆきずりにもあなかしこ富士賀島のへんへ立ちよるべからずと申せども、いかが候らんとをばつかなし」<sup>②</sup>是非今一度会いたいと思ひ。いろいろと心

の葛藤に悩み通り過ぎました。「千度をもひしかども」云々は佐渡流罪以前に高橋氏は聖祖に幾度か拝眉し、信徒として懇ろな教えを受けていたことを物語っている。故に高橋入道は鎌倉伝道時代に入信していることが知られる。この御書はまた聖祖の慈悲の深さを知る御書でもあろう。檀越の身に及ぼす影響を考慮して行動せられた聖祖の深い心遣いがあらわれている。即ち駿河の國は相模守殿の御領地であり、殊に富士などには後家尼御前の身内の人々が多く、その人たちは日蓮を故最明寺時頼殿や極楽寺重時殿の敵として憤っているのであるから、たとえ赦されたとはいえ度々流罪となった日蓮が立ち寄った事が聞こえると、貴殿らに思わぬ迷惑をかけるようなことがあつては心苦しいので遠慮した、その後いまでもって迷惑のかかることを恐れて御手紙の返事も申し上げなかつたのである。この御房たちの平生のゆきかえりにも富士賀島のあたりへ立ち寄るなど申し聞かせてあるがどうか覚束なく思っている。身延入山の途次子細あつて立ち寄らなかつた事情を述べた本書は建治二年七月十二日の御書であるが、御書の末尾に「御所労の大事にならせ給ひて候なる事あさましく候。……而も法華経は閻浮提人病之良薬とこそとかれて候へ。閻浮の内の人病の身なり。法華経の薬あり。三事すでに相應しぬ。一身いかでかたすからざるべき。但し御疑の御わたり候はんをば力をよばず。南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経」くく」

とあるによつてこの時入道は既に病が重くなつていたので、法華経の良薬と法華経行者の貴殿と平癒を祈る日蓮との三事が相應しているから命が助からぬ筈があろうかと、感謝激励されている。本書の「但し御疑のわたり候はんをば力をよばず」とあるを誤解され「ただあなたが私（日蓮）の言葉に疑いを持たれてはどうすることも出来ません」と解説する方もいるが、「但し法華経を疑うなら日蓮の力も及ばない」と訂正されるべきであらう。本書の二週間後に持妙尼に与えた御書に「但しきだめて念仏者にてやをはらすらん<sup>10</sup>」とあるを「入道殿はまだ念仏者でおられるだろう」

と再び誤解されている。高橋入道は文永の初期に聖祖に帰依した強信者であり、然も入道の妻持妙尼は日興の叔母にあたるが、妻より入道の方が信心が強かったのである即ち「過去遠遠より女の身となりしがこのおとこ娑婆最後のぜんちしきなりけり」あなたは遠い過去の世から幾度も女と生まれたが今度の夫、入道殿が娑婆世界の最後の男でありあなたを法華経へ導いた善知識である。即ち入道殿はあなたを法華経へ引き入れた徳の高い人であるとなたてているのである。故に持妙尼は夫入道の信仰に導かれ入信したもののようである。「但しさだめて念仏者にてやをはずらん」とは文永八年十月十日依智を立て佐渡へと向はれ文永十一年三月十三日眞浦の津から出帆して越後の柏崎へ着いた一年半以上の月日の過ぎ去った現在も日本國の人々は「念仏者にてやをわはずらん」との意であつて「入道殿はまだ念仏者でおられるのだろう」との説は強く否定されるべきである。

窪尼へ与えられた御書は持妙尼御前御返事（異称 妙心尼御前御返事 弘安二・十一・二二）。窪尼御前御返事（異称 與持妙尼書 弘安元・六・二十七）の御書二篇と他の五篇含めて七篇でいずれも短篇で日興筆の写本が保存されている。

窪尼及び持妙尼・妙心尼については先師の間に諸説あり紛糾していたことは、『縮刷遺文』『昭和定本』の異称という対告衆によって窺われる。その中持妙尼については尼崎本興寺に伝えられた聖祖の御本尊及び日興の『本尊分与帳』によつて、高橋六郎兵衛入道の妻は持妙尼であることが明確となつたことは前説の如くである。しかしいまだに高橋入道の妻持妙尼は窪尼とも称せられると信じている方がいる。その根拠は恐らく『攷異』の「持妙は戒名なり処を以て之を呼で窪尼と曰ふ」<sup>[1]</sup>によられたか、又は『御遺文講義』「窪尼とは地名による称呼で、戒名に依つて持妙尼と呼ぶのである。松野六郎左衛門の妻とも西山の大内氏の妻とも伝ふれども詳かでない」<sup>[2]</sup>と述べている。これとれ『攷異』



の説を踏襲したものである。窪尼に与えられた御書は七篇数えられ持妙尼御前御返事も従来この七篇の中に含まれているのである。果たして持妙尼が窪尼であろうか、持妙尼には子がなかった。窪尼には遺児女一人がいる。既に述べた如く持妙尼の夫は高橋入道であり、窪尼の夫は不明である。先ずこのへんより手掛かりを掴みたいが論文提出がせまっているので他日を期したい。高橋入道は前述の如く、聖祖鎌倉伝道時代からの入信者で然も「異称加島書」と云われる「高橋入道殿御返事」は、佐渡に開顕された重要な法門が述べられている。かかる立場からも「入道殿はまだ念仏者でおられるのだらう」とは心外この上ない学説である。

「但八幡聖教の肝心・法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば……此等の大菩薩等ののぞみ申せしかども佛ゆるし給はず 大地の底より上行菩薩と申せし老人を召しいだして、多寶佛・十方の諸佛の御前にして、釋迦如来七寶の塔中にして、妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う」<sup>(13)</sup> 上行菩薩出現して妙法五字を弘むべし、一閻浮提の一切衆生にさづくとの佛の豫言の如く大難重なり、日蓮が法華經の行者なること疑いなしと断言せられたのである。次いでこの御書は聖祖と高橋入道との個人的関係としての親近感は前述の如く佐渡在島中既に漂白の思いを入道に告げていること、是非一度会いたいと思いいろいろと心の葛藤に悩み通り過ぎたこと、貴殿らに迷惑をかけたくないこと等が述べられている。この御書は七月十二日の日付で、同月二十六日に今度は妻に慰めの御書（高橋殿御書 定一〇九三）を与えている。「女人の御身として尼とならせ給て候なり」入道の妻が入道の快癒を祈って尼となったのか、又は夫の命が長くないのを思つて尼となったのであろうか、末文に「なによりも入道殿の御所勞なげき入つて候」とあり、何よりも先ず入道殿の御病氣のことが心配であると手紙を出している。しかし入道は快復することなく死へ旅立つてしまふのである。このことは「智慧亡国御書 定一一三一」によつて推測される。真跡は大石寺に現存しているが日付・

宛て名の部分が欠けているが、本書の末文の一節によつて対告と系年を推し量ることができるとされている御書である。

「此大進阿闍梨を故六郎入道の御はかへつかわし候。むかしこの法門を聞いて候人々には、関東の内ならば、我とゆきて其はかに自我偈よみ候はんと存じて候。しかれども、当時のありさまは日蓮かしこへゆくならば、其日に一國にきこへ、又かまくらまでもさわぎ候はんか。心ざしある人なるとも、ゆきたらんところの人人め（目）ををそれぬべし。いまままでとぶらい候はねば、聖霊いかにこひしくをはすらんとをもへば、あるやうもありなん。そのほどまづ弟子をつかわして御はかに自我偈をよませまいらせしなり」とあるが、鈴木一成先生の研究によれば「聖祖の門下で六郎入道を名乗る人は三人いるが、そのうち南部六郎入道実長は聖滅後も生存した人故当てはまらない。松野六郎左衛門入道は、身延入山後に入信した人であり、又六郎入道の周囲の情況は松野氏の環境でない。本書に記されている如き急迫した事情は身延入山前後の加島周辺の事情そのものでなければならぬ」と述べ「本書の故六郎入道は加島の高橋入道でなければならぬ」と詳細に考究されている。

入道の妻が日興の叔母であるという縁から入道は日興の弟子となり聖祖より妙常・妙諦の法号を授与されたと伝えられる。日興の弟子であつた日弁が、日興を介して聖祖の直弟子となり聖祖六十歳の賀寿を記念して日弁が高橋入道の屋敷に蓮寿山常諦寺を創立（常諦寺縁起）と伝えられている。『統紀』・『攷異』もこのことを述べているが、このことから推考すれば入道夫妻に子供がなかつたのであろう。尚聖祖が入道夫妻を特に心にかけていた信者であつた。「去年かまくらより此ところへにげ入り候ひし時、道にて候へば各々にも申すべく候ひしかども申す事もなし」（定一〇八七）

前出の富木氏への御書「流浪すべき身」と高橋氏への「にげ入」の御書の句を中心に身延入山について代表的先師の見解を紹介する。

### 三、身延入山に関しての先師の見解

1、三たび諫めて聴かれざるが故に去ると謂ふが如きは……然らば日蓮の真意何處にか存すと為す。吾人断じて曰く、是れ蒙古の襲来を豫想せるが為めのみと。<sup>(14)</sup>

高山樗牛

2、蒙古軍乱入の場合のはがれ来たれ、と伝えられたことなどを考え合わせると、日蓮入山の理由の一つは、今日の言葉でいう疎開のためといつてよいようである。<sup>(15)</sup>

影山堯雄

3、法のたたかにお疲れになられたかのように見えるが、身延に永遠の灯をうちてるための法戦の場を遷された。<sup>(16)</sup>

渡辺宝陽博士

4、これ以上鎌倉に滞留することの無意味なことを知り、山林に交わつて世の推移を見、自身の滅後、正法広布のための門徒の教養育成を図らねばならぬことを決意した。<sup>(17)</sup>

宮崎英修博士

5、頼綱との会見の決裂によつて挫折感をいだいたかれの望んだのは、漂泊の旅であつた。<sup>(18)</sup>

高木豊博士

6、富木氏への御書の中に「流浪すべき身」の意味は、一人になることへの願いを述べたもの、又高橋氏への「にげ入る」という言葉も集団からの脱出をも含意している。読経・読書に専念したかつたからである。<sup>(19)</sup>

上原専禄博士

7、鈴木一成立正大教授は入山の理由を対外的と内面的の二方面に分けて論ぜられている。<sup>(20)</sup>

イ、対外的な入山の理由

國の恩を報ぜんが為に三度諫めた。三度諫めて用ゐられずんば去るとは古来の掟である。現在の幕府を動かす事は断念しなければならぬ。静かに山林に交わつて世の成行を見、望みを未来に属しやう。

ロ、内面的な入山の理由

諫曉再三に及べば經の豫言の如く留難重畳した。法華經の行者として役目は既に果し、仏法中怨の責は免れたのである。これからは世を避けて、ひたすらに自己沈潜の境地に入り、門徒教養の事に徒はう

以上の通り身延入山について學者により諸説あり、又特色のある説と枚挙にいとまがないが、いずれが最も妥当性の高い評価を得るであろうか、今ここに何人も納得し得るものを挙げれば彼の有名な『法華經の行者日蓮』の文面である。

「法華經の行者は、世を憂へて世を遁れた、然し世を遁れる事に依つて、世を救はうとしたのである。外見は隱遁の如く見えても、内には折伏の烈火を蓄へ、國の為、又法の為に、不断の祈念を凝らしたものの、即ち身延の隱遁であつた<sup>(21)</sup>」と述べ、姉崎博士は更に身延入山の動機を二方面に考察されている。

一は世を救う為の積極的事業として「法華經の行者」はユダヤの「神の惱める僕」と同じく、責められ、打たれ、迫害せられる事によつて、益すその信を堅うし志を強うし、而して死後萬年の大理想を抱いて山に入った<sup>(22)</sup>。

二は消極の方面、「懺悔滅罪の觀念に基いて入山の動機を觀察しよう。但し消極と云ふが、此も亦大積極の一面である。即ち日蓮が過去謗法の罪を消す為に、佐渡の生活を身延に延長して、懺悔の實を挙げると共に、此の儀表的又は代償的滅罪に依つて、一切衆生の眼を開き、彼等の罪を滅すといふ意味での、大規模の滅罪が、身延生活の意義であつ

所謂、諸先生方の所見は「三諫而去」「遁世」「疎開」「望みを未来に託す」「門下の教育」「懺悔」「滅罪」「如来使の自覚」更には「釋尊に対する報恩と給仕」等いろいろな説が挙げられる。尚見逃してならないことは聖祖の法華經信仰の行動に「与同罪」という一つの觀念があつたのである。

他者の地獄行きの可能性をみてそれを諫め教導しなければ、自己が正信であろうとも「与同罪」ではないか、即ち彼らと同じ誑法罪を免れられないこと、そこには己の後生善処ばかりなく、自他ともにという共業所感の積極的働きがあつた。故に「一切衆生の同一の苦は、悉く是れ日蓮一人の苦なりと申すべし」と自他共同の滅罪的発言と個の救済は全体を救うことに依つて可能であるとの法華經の世界を欣求したのが身延での生活であつた。

身延山中九年間の法華經の読誦・解説を行うにつれて、入山当初の意志も多少変化させられたものかと想像される。立正大学名誉教授茂田井博士は「身延に入つて諸檀越の供養が増えてからは……自らが法華經になり法華經が自らなる……このような一途な法華經への帰投がどうしても為し得たのであろうか（日蓮 その人と心二四三）との見解を示されている。このように彼我一如の宗教体験と捉えたことに首肯せられるものがある、従つて今その理由を挙げてみたい。

法華經法師品に「若復有人。受持。讀誦。解説。書寫。妙法華經。乃至一偈。於此經卷。敬視如佛。」（岩波中一四二）「吾滅後惡世能是經者 當合掌禮敬 如供養世尊」（岩波中一五〇）これは法華經という經卷に対し、敬い視ると。佛の如くにしてとあるように法華經と釈迦佛とを一如と見る立場である、既に述べたごとく聖祖は『守護國家論』で「法華經は釈迦佛也」と述べられたのは法師品を文証とせられたからであらうか、更に『梵音聲御書』の文を上げ

てみよう。「釈迦佛と法華經の文字とはかはれども心は一つなり。しかれば法華經の文字を拝見せさせ給ふは生身の釈迦如来にあひまいらせたりとおぼしめすべし」（定六六六）と法佛一体をお説きになつてゐるのである。

#### 四、法華經への供養

- ①佛滅度後 供養舍利（序品三四） ②諸仏滅度已 供養舍利者 起万億種塔（方便品一一二）
- ③諸佛滅後 起七寶塔 亦以華香 供養舍利（授記品三一七）
- ④若經卷所住之處 皆應起七寶塔 不須復安舍利 此中已有 如来全身（法師品一五四）
- ⑤讀誦此經 持說書寫 種種供養（勸持品二二六） ⑥衆見我滅度 広供養舍利（壽量品三〇）
- ⑦香油蘇燈 供養經卷（分別功德品五六） ⑧亦當禮拜供養 釈迦牟尼佛（神力品一五六）
- ⑨是中皆應 起塔供養（神力品一六〇）

右の如く佛舍利を、佛塔を宝塔を供養すべし、法華經を受持するものを供養すべし、種々に供養し生命をも惜しまざるべし、釈尊を禮拜し供養すべし、この經を一心に受持・讀・誦・解説・書寫し、經卷のあるところはどこでも塔を建てて供養すべきである等、法華經二十八品中供養の文字がないのが藥草喩品・隨喜功德品・囑累品の三品で、他の二十五品合わせて供養の文字は約百四十か所以上に及んでゐる、これによつて一切經中最も供養を強調してゐるのは法華經ではあるまいか、故に聖祖の法華經と釈尊への信仰の一端をここにみるのである。

聖祖は入山後の供養物を釈迦佛・法華經の御宝前に供えられたことをしばしば述べられている。信者からの供養品を聖祖への供養品とせず、釈尊と法華經への御供養とし、そして「法華經」の御宝前に供えられた旨の礼状が釈迦佛

よりはるかに多いことが知られる。

聖祖は法華經の色読者である何人もいう、それは主として耐え忍んだ菩薩行者としての立場が強調されている。私は、身延での生活の中「法華經の行者」の実践の姿勢を偲ぶ。前述の法華經の供養のところ述べた如く、②「方便品」では佛舍利供養のために佛塔建立がなされた。④「法師品」では經卷を七宝塔に安置すれば、また舍利を安ずることをもちいず、なぜならこの中には、すでに如来の全身います。次いで經はこの塔に礼拝し供養を捧げることが無上等正覚への道であるという。更に經はこの法華經を見聞し、讀誦し、書持し、供養することあたわざるものは当に知るべし、この人は未だよく菩薩の道を行ぜざるなり。

「法師品」以前では、佛舍利塔のストウパの供養が説かれていたが、以後では經典尊重の結果、經中心のチャイトヤの建立を強調している。依つて法華經の塔觀に二種あることが知られる。尚⑦「分別功德品」及び⑨「神力品」も「法師品」とその主張は一致するし、又⑥「壽量品」は広供養舍利と云い、⑧「神力品」は釈迦牟尼佛を礼拝し供養すべしという。故に法華經は兩塔觀が錯綜していると云えるのである。

聖祖が供養品を釈迦佛・法華經の御宝前に供えられたのは「法華經」の如く実践せられていたと見ることができよう。法華經にもとずいた生活をしていた明かであると思う、即ち「神力品」の冒頭に「佛の滅後において広くこの法華經を受持し讀誦し解説し書寫してこれを供養いたします」とあるように実践せられていたのである。故にこの点からも法華經の行者と云えるのである。

五、身延入山道程の日弁

文永十一年（一二七四）五月十二日鎌倉を出発した聖祖の一行は平塚・小田原を経て十二日は相模の酒匂に宿し、十三日は足柄峠を越えて竹の下に泊まり、十四日は黄瀬川に沿って車返（今沼津辺）、十五日は富士大宮に至り、十六日は富士川の畔り南部の内房に泊まり、十七日は波木井の館に到着している。即ち富士山の南を廻られた六日間の旅路であった。（元祖化導記日蓮教学研究所紀要第二号p五七・日蓮聖人正伝鈴木一成p二二二）

身延入山の道筋である小田原千代に、千葉山蓮華寺がある。蓮華寺の沿革概要によれば開山は中老僧越後阿闍梨日弁上人。創立年代については詳らかでないが、天台宗の学寮で蓮華院と号し元東大友（現小田原市東大友）にあった。文永十一年（一二七四）五月宗祖身延ご入山の砌この地をお通りになられ、一山の大家衆御徳に接し悉く改宗したと伝えられる。この時日弁上人を初祖師にいただき、千代山蓮華寺と称し日弁・日鏡・日忍と連なる法華経の道場となり、後千葉山蓮華寺と改称する。この蓮華寺沿革とほぼ同じ記録と言えるものに作者・年代共に不明であるが、慶長八年（一六〇三）以前の作と推定される『當家諸門流繼図』（宗全代十八卷p一六二）がある。同寺日忍とは相橋長福寺日忍でなく、峰妙興寺二世日忍である。

鈴木一成先生は内房宿泊説であるが、井上恵宏先生は富木氏の書状（定八〇九）に内房宿泊の記載がないから古来の伝説は誤りであるとの見解を示されているが、遺文辞典によれば身延入山の途次この地に一泊し、これを供養した内房尼がのちに自家を改めて寺としたのが今の本成寺とも伝えるところ述べている。

内房とは駿州（庵原郡）内房の地のことで、現在の富士郡芝川町内房この地に内房尼そしてその娘である内房女房



『内房女房御返事』（定一七八四）『三沢鈔』（定一四四三）の三沢氏が居住していた。内房女房の父の百ヶ日忌供養に布施十貫文と「女弟子大中臣氏敬白」を著した願文が身延の聖祖に送られていることから、相当身分のある女房であろうと推測されている。又『三沢鈔』によれば尼が氏神参詣のついでに身延に立ち寄つたため、尼の身でありながら佛を先にしなかつたことは、本末の顛倒でありそのことを誠告しそれを知らせるために体面せず追いつ返したことが見える。

次に駿河を教化の地として活動していた日弁は、相当高い身分である内房母子ときわめて親しい間柄であつたことは『内記左近入道殿御返事』によつて知られる。

「御器の事は越後公御房申し候べし。御心ざし深き由 内房へ申させ給い候へ」（定一九〇七）

『當家諸門流繼図』によれば日弁の生国は駿河の国であらうと述べている。又、峰の古文書（宗全史伝旧記部五P一五〇）によれば洛陽生誕説で、少納言の孫に当たり幼名を寅鷹と称したという。内房尼の夫が「大中臣氏」に出自する人であるから由緒深い家系であり内房家と懇意の間柄であれば、左近入道の社会的地位も推量される。内房の殿・左近入道と関係の深い弟子越後房を「越後公御房」と二重敬称して呼んでいる事実は日弁の身分とかかわつた御配慮であろうか。（拙文興隆学林紀要第七号P一二参照）

大中臣氏を名のる今一人の有力檀越は、鎌倉時代の肖像彫刻の代表作と謳わる池上本門寺の国宝である祖師像の胎内から大中臣氏の姓が見える。聖祖のご頂骨を納めた青銅の経筒が見出され、経筒によれば〈定本 三巻口絵参照〉の文字が刻まれている。上記により聖祖の七回忌にあたる正応元年に日朗聖人が大別当、宗仲夫妻が大施主となり造立した御影である。唐金筒の裏に刻まれている「大中臣宗仲」の銘によつて、池上氏は藤原氏出身であることと宗仲

の室が清原氏女であることが判明する。清原氏の祖先は天武天皇……舎人親王と伝えられている。<sup>(25)</sup>  
以下次号に聖祖晩年に於ける日弁（その三）として掲載したい。

註

(1) 元祖化導記

日蓮教学研究所紀要 第二号 p 五八

(2) 宗全 興尊集

p 一一五

(3) 日蓮とその門弟

高木豊

p 一九八

(4) 日蓮とその門弟

p 二〇三

(5) 富士宗学要集 第五卷

p 七六

(6) 日蓮宗事典

p 五一六

(7) 高橋入道殿御返事

定 p 一〇八八

(8) 高橋入道殿御返事

定 p 一〇八九

(9) 高橋入道殿御返事

定 p 一〇九一

(10) 高橋入道殿御返事

定 p 一〇九四

(11) 年譜攷異

p 一六〇

(12) 日蓮聖人御遺文講義 第十二卷

p 二二九

(13) 高橋入道殿御返事

定 p 一〇八四

- (14) 高山樗牛と日蓮上人 p 八七
- (15) 日蓮宗布教の研究 p 三六
- (16) 日蓮のことば p 二〇四〜二〇六
- (17) 日蓮とその弟子 p 一〇八
- (18) 日蓮とその門弟 p 一五
- (19) 日蓮身延入山考 p 二一六〜二二一
- (20) 日蓮聖人正伝 p 三三〇
- (21) 法華経の行者日蓮 p 三五五〜三五六
- (22) 法華経の行者日蓮 p 三三八
- (23) 法華経の行者日蓮 定 p 一八四七
- (24) 諫暁八幡抄 p 八三〇
- (25) 読史備要

清原氏

講談社